
旅人と男

出口 常葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人と男

【NZコード】

N8686D

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

初老の男は商売用の荷物を積んで街道を歩いていた。そんな彼を呼び止めたのは、鈴の音を響かせる旅人だった。

荷馬車が街道をゆっくりと進んでいた。ダク足の一頭の馬の手綱を握るのは初老の男。麗らかな日差しの下、日よけの麦藁帽子を被つて、コーンパイプを燻らせていく。

「すみません」

男は声を掛けられ、馬車を止めた。

見れば、街道脇の草原に一人の男が立っていた。姿を見ると、旅人のようだった。

「この先に村があると聞いたんですが、どれくらいかかりますか?」「そうだなあ、歩いて行くなら、二時間ぐらいじゃないか」

旅人の言葉に、少し考えて男は答えた。すると、旅人は苦笑いを一つ浮かべてため息をついた。

ちりりん、どこかで鈴の音がなつた。
「向こうの町から歩いてきたんですが、もう足がパンパンになっちゃって」

「そうか、そいつは災難だな」

男はそう言いながら、改めて旅人の姿を良く見た。長い旅をしているのだろう、着ている服はあちこち擦り切れたり、ほつれたりしている。しかし、服そのものは相当頑丈に出来ているようで、その機能を損なつてはいなかつた。頭には日よけの帽子を被り、マントを羽織つている。見た感じ、鈴はどこにもついていない様だつた。

「ところで、いい馬車ですね」

「あん?」

突然そんなことを言い出した旅人に、男は訝しげな目を向けた。

「物は相談なんですが、荷台の隅っこに乗せて頂く訳には行かないですかねえ」

「生憎、荷台は一杯でね」

にべも無く、男はそう言って旅人の要求を突っぱねた。旅人はた

め息をつき、懐からジャラジャラと音のする袋を取り出した。その途端に、男の目つきが変わった。

「……銀貨で十枚」

「それじゃ、乗合馬車より高い。いい所四枚でしょう」

「それなら、あと三時間、頑張つて歩くんだな。日が暮れたら、この辺は狼が出るらしいぞ」

男はそう言って手綱を握りなおす。

「ああ、分かつたよ。けど、せめて八枚にしてくれませんか」

「……九枚だ」

男の言葉に、旅人は大きくため息をついた。

「分かつた。村に着いたら払います」

そう言つて荷台に乗り込もうとする旅人を、男は大声で呼び戻す。

「前払いだ」

「……どこまでがめついんだよ、全く」

小さく舌打ちを一つして、旅人は袋の中から銀色の硬貨を九枚取り出して男に渡した。

荷馬車の幌の中は、男の言つとおり荷物で満載だった。木箱や布袋、鉄の箱もある。

「やれやれ、これで九枚か……でもまあ、悪くない」

ため息混じりに旅人は小さなスペースに体を縮こまらせて腰を下ろした。馬車は再びゆっくりと動き出した。

「凄い荷物ですねえ」

荷物を見回しながら、旅人は男に話しかけた。

「大事な商売道具だ。触るんじゃないぞ」

「わかっていますよ」

旅人はそう言つて、木箱の上に自分の荷物を置いた。

「それにしてもいい馬車だなあ。いいなあ」

旅人はあちこち見回しながら、そう一人呟いていた。

「あんた、何で村に行くんだ?」

「まあ、当ての無い旅ですよ」

布袋をぽんぽんと叩きながら、旅人はそう答えた。男は御者台に座つてずっと前を向いてるので、旅人のその様子に気づいている様子はない。

「あの村にや、何にも無いぞ」

「そうなんですか？あの村のこと知つてるんですね？」

「まあな。行商で一つ先の街に行くときに、宿にするんだ」

そう言いながら、男は口から煙を吐き出す。旅人はその男をじつと見つめていた。男は突然旅人が黙つてしまつたことを妙に思ったのか、ふと後ろを振り返る。

「どうかしたか？」

「ああ、いえ。宿があるなら、一曲歌わせてもらえる酒場もあるかなと思いましてね」

「ほう、あんた楽器が出来るのかい？」

「ええ、我流ですけどね」

そう言いながら、旅人はどうやつてしまつていたのか、マントの裏側からからリュートを取り出した。ちりりんと、鈴の澄んだ音色。見れば、丁度リュートの首の部分に、鈴がくくりつけてあるのだった。指で弦をはじくと、独特的の軽い音が流れ出し、それと一緒に鈴が小さく音を立てる。

「おう、いいね。景気付けに一曲歌つてくれや」

「……僕の曲は、一曲あたり銀貨五枚ですよ？」

「……がめつい奴だな」

お前が言つなどでも言いたげに、旅人は苦々しい笑顔を浮かべた。「お試しだ。俺が気に入るがどうかわからねえだろ？。気にいらねえもんに金払うのは嫌だぜ」

「……ちやつかりしてるなあ。じゃあ、さわりだけですからね」

そう言つて、旅人はリュートの弦に添えた指を動かし始めた。軽やかな音が流れ始める。そして、そのれとあわせて鳴る鈴の涼やかな音。麗らかな日差しによくマッチした伴奏に、旅人の歌声が混じ

る。その歌声は、とても澄んでいた。先ほどまで喋っていた声とは、明らかに印象が違う。

男は始めから金など払つつもりは無かつた。聴き終えたら「俺の耳にはあわねえ」ときつぱり言ってやるつもりだつた。

ところがどうだらう、気がつけば男はリコードに聞き惚れていた。どれだけ拒もうとしても、メロディは心の中に入り込んできて、男の心を無理矢理に解きほぐそうとする。果てしなく心地良く、それでいてとても苦痛だつた。それは、自分の心があががなおうとしているからだと、男はすぐに気付いた。

音楽と歌声は徐々に盛り上がりを見せた。男の心は既にあがなうのを止めていた。ほぐされるままにその心を委ねていた。

端から見れば、音楽を奏でながらゆっくりと進む馬車。しかし、御者台の男の目は、すっかり虚ろになつっていた。

後少しで楽になる。そう感じた瞬間、音楽と歌は唐突に途絶えた。朦朧としていた意識はたちまち戻つた。振り返ると、旅人は男のほうを見て、片目をつぶつて笑つてを見せた。

「はい、お試しはここまで」

「あ……ああ」

呆然とする意識の中から、沸き起る一つの感情。

この旅人の曲をもつと聴きたい。金なんていくら払つてもいい。ただ、この曲に身を委ねたい。単純で力強い欲望は、理性が戻る前に男の体を駆け巡つた。

「さて、どうします?」

「五枚……だつたな」

男は腰に下げた袋の中から、銀色の硬貨を五枚引つつかみ、旅人のほうに投げた。チャリンと音がして、驚いたことにその銀貨は全て旅人の手の中に納まつていた。

「まいど。でも駄目だつてば。お金投げちゃ。大事にしなくちやね。お金粗末にする人は、いづれ全てを失うよ?」

「余計なお世話だ。さつさと聞かせてくれ」

何かに焦る様に、男はそう言つて旅人を急き立てた。

「気に入つて貰えた？嬉しいなあ。ところで、この馬車とかも欲しいんだけど、何曲ぐらい歌つたら貰えるかなあ」

「そりや、いくらなんでも無茶だ。大事な商売道具と言つたらう。何百曲歌つたところで、やるもんか」

「ちえ、やっぱり。仕方ないなあ」

旅人の口調が随分と横柄になつてゐることに、男は氣付いていた。

「馬鹿なこと言つてないで、とつとと弾いてくれ。金は払つたんだからな」

「はいはい、ただいまつと」

銀貨を自分の懷に仕舞いこみ、旅人は改めてリュートを構えた。ちりりんと鈴がなつて、それだけで男の意識はまた言い様の無い心地よさの中に浸されるのだった。

「おい、あんた。着いたよ」

そう言われ、初老の男は目を開けた。何だかとても心地良い夢を見ていたような気がする。隣には自分を馬車に乗せてくれた旅人が座つていた。

「どうやら、村に着いたらしい。」

「寝るんだつたら、荷台にでも乗つてもいいんだつたかな。落ちないか冷や冷やしたよ」

旅人はそう言つて苦笑した。男は急に恥ずかしくなつて、慌てて馬車から降りた。

「すまない、助かつたよ」

男が恥ずかしげに礼を言つと、旅人は軽やかに笑つて「いいつてことさ」と言つた。

「それじや」

そう言つて踵を返した男の背中に、旅人は声を掛けて呼び止めた。

「あんた、忘れ物だぞ」

「え？」

振り返る男の目に、飛んでくる皮袋が映った。慌てて受け止めようとするが、上手く受け取れず、地面に落としてしまう。濁った金属音を立てて地面に落ちた皮袋を、慌てて拾い上げる男。「いやあ、どうもありがとう。これが無くなったら、文無しになるところだった」

「それに、これもだ」

そう言つてもう一つ差し出したのは、コーンパイプだった。

「これは……」

「あんたのだろう？ 僕はいらないからな」

耳元で、鈴が鳴つたような気がした。

旅人にそう言わると、なんだかそれは自分のものだつた気がしてきた。手を差し出して受け取る。試しに口に加えてみると、驚くほどにしつくり来た。

「うん、これは私のだ」

「だろう？」

「……私は、他に何か持つていなかつたかな？」

首を傾げる男を、旅人は一つ鼻で笑い飛ばした。

「余計なことは考えないほうがいい。疲れるだけさ」

ちりりん、とどこかで鈴が鳴つた。

そう言つて旅人は、手綱を一つ打ち鳴らした。動き始める馬車を

見ながら、男の気持ちはどうにもすつきりしないままだった。

けど、旅人の言つた「余計なことは考えないほうがいい」と言つて、言葉が、彼に考えるのを止めさせた。

「まあ、いいか」

男はそう呟き、馬車に背を向けた。

ちやりちやりと音のする皮袋を、念のため男は開けてみた。中には、銀色の硬貨が四枚入つていた。

「銀貨四枚……」

それにコーンパイプが一つ。

さて、これがどうじょうか。

(後書き)

うーん、なんともほん。せや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686d/>

旅人と男

2010年10月8日15時09分発行